

〔そのとき、イエスは弟子たちに言われた。〕「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。- 中略- 「断食するときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は、断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦しくする。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。」 —マタイによる福音書 6章—

『悪霊と戦う方法』

私はイエスの宣教に二つのパターンを見えています。①聞く耳を持つ人々への宣教 ②聞く耳を持たない者への宣教です。

①に対して、イエスは「語る」宣教をし、②に対しては「沈黙」による宣教をしています。ここで ②の「沈黙による宣教」が、『悪霊と戦う方法』です

「聞く耳を持たない者」とは、究極的に、自分を生かすために相手の存在を抹殺することに向かっている者のことで「敵対者」「迫害者」「殺人者」ということになります。この殺人者らと対峙するとき、私たちの真の相手は、もはやその人ではなく、その人の背後でその人をコントロールしている悪霊であると捉えます。そのようにみると、十字架に至るイエスの受難死はまさにこの悪霊との戦いの最後の仕上げだったといえます。

悪霊にとって、その存在を許されている居場所は、ただ一つ「神不在の場」。つまり私たちの本性（自己保身と自己中心性＝エゴイズム）である「自我」です。したがって、迫害者と私の関わりにおいて、私が自我で相手と関わっているとすれば、それは敵の思うツボで、行きつくところは滅びしかありません。悪霊との戦いで心すべきは、悪霊と交戦しうる者は、神お一人を置いていないという点です。ですからキリストは自分と関わる相手が「聞く耳を持たない者」であるとき、論争せず、沈黙に入ります（マタイ 26.63, 27.12-14）。それは自我で戦わないで神に戦ってもらおう戦法であり、出エジプトの時、御父から教えられた過ぎ越し（出 12.1-13）の方法です。

キリストが「沈黙する」とは、自分の自我を封じて、この御父の指示に従うことでした。御父の指示は「子羊の血を見る」まで（出 12.13）でしたから、キリストが自我を封じ切った（死）とき、そこに聖霊が住み（復活）、それが住み家を奪われた悪霊の完全な敗北でした。おなじように、自我に死んだ私は、もはや私（自我）ではなく聖霊が私の中に生きておられ、したがって私と迫害者との関係は、私の中に住む聖霊と迫害者との対峙となります。この時、迫害者は神聖なものの前にさらけ出しているのは、醜い穢れた自分に気づかされて敗北を悟ります。そしてその敗北の苦さの中で「悔い改めの救い」か「ひらきなおりの滅び」かの選択の場に招かれます。イエスをやりで突き刺した兵士の言葉「この人は神の子だった」は、こうして、聞く耳を持たない者たちが、自分たちが手にかけた者の死によって救いにあずかる者とされる道をしめしているのです。